

鎌倉国宝館所蔵「刀 金象嵌銘 雲次」と同館の過去の刀剣展示について

志村 峻（鎌倉歴史文化交流館学芸員）

はじめに

鎌倉は、刀工粟田口国綱、備前三郎国宗、福岡一文字助真が鎌倉に招聘されて以降、新藤伍国光によって相州伝が確立され、行光、正宗、貞宗らを経て、綱広が江戸時代から現代までその名を残してきた刀剣史上重要な地である。しかしながら、鎌倉国宝館に現在所蔵されている刀剣は極めて少ない。今回は鎌倉国宝館に所蔵された刀剣類の内、昭和 35 年（1960）に寄贈された「刀 金象嵌銘 雲次」（以下、雲次または本品と称す）の資料紹介を行う。また、鎌倉国宝館ではおよそ 60 年超にわたり刀剣を主とする展覧会は行われていない。本稿で紹介する雲次は、鎌倉国宝館で行われた最後の刀剣展で出品され、その後寄贈されたものである。雲次が出品された展覧会と合わせ、戦前から戦後にかけて 4 回刀剣の特別展が開催されており、それらの展示についてもあわせて探っていききたい。

1. 資料概要

（資料名） 刀 金象嵌銘 雲次

（法 量） 長さ 91.4 cm 刃長 71.6 cm 反り 2.6 cm

本品は、昭和 37 年 4 月 1 日に鎌倉市の個人の方（以下 A 氏）から鎌倉国宝館へ寄贈された刀である【写真 1】。無銘大磨上、金象嵌銘で「雲次」と入る¹。本品の金象嵌は、一部に剥離がみられる。雲次は備前国宇甘庄の刀工で、鎌倉時代末期から室町時代にかけて活躍した。同派の刀工は「雲」の字を冠することから雲類と呼ばれ、雲次の他に雲生、雲重らがいる。本品は、雲次の特徴である中直刃小丁子乱れで小足が見事に入る。文化財の指定はされていないが、非常に状態は良く残っている²。

鎌倉国宝館に現在所蔵されている刀剣は少なく、そのほとんどが寄託品である。この雲次は国宝館所蔵の刀剣の中でも最も貴重な品である。寄贈者の A 氏は、昭和 35 年に開かれた「鎌倉市制施行二十周年記念 新春特別展 鎌倉名刀展」に出品しており、おそらくその展示をきっかけに鎌倉国宝館に寄贈したと考えられる。本品が展示されたのは、その一回のみで寄贈されて以降は展示されていない。また、A 氏と鎌倉国宝館の関りはそれ以前からあったようである。『鎌倉国宝館庶務日誌』（以下『庶務日誌』）昭和 23 年（1948）の記録から A 氏が雲次の寄贈以前から、国宝館に彫刻類を寄託していたことがわかっている。雲次の寄贈の際には、A 氏の子息が来館しており、手続きは A 氏本人ではなくその子息が行っていたと思われる。



【写真 1】刀 金象嵌銘 雲次

2. 附属の折紙・鑑定小札

本品には、刀剣の鑑定書である折紙【写真2・3】と鑑定小札³【写真4・5】が付属している。鑑定小札には、「正月」の朱印があり、年次は記されていないが裏面に「戊寅」とある。鑑定小札は本阿弥光遜氏の印があり、その存命期間から昭和13年（1938）に発行されたものと推測される。折紙は刀剣鑑定書として最も格式の高いものであり、刀剣研磨と鑑定を生業とする本阿弥家によって発給された。本阿弥家は初代を妙本と言い、五条家の祖五条高長の子と伝わる。代々室町幕府に仕え、九代光徳の時に豊臣秀吉から折紙の発行を許可され、江戸時代には刀剣極所に任ぜられた⁴。江戸時代には、初代妙本の命日である毎月3日に本家と分家が一堂に会し、折紙を発行した。そのため、折紙の日付は通常三日付になっている。本品付属の同年3月3日（資料上は「弥生三日」）に発行された折紙は、「光遜極」とあるが、わずか3か月の間に鑑定小札と折紙の両方を発行したとは考えづらい。さらに折紙の花押は、歴代の本阿弥の花押と比較しても異質であることから、光遜本人によるものとは判断しがたい。また、本来の折紙には裏面に豊臣秀吉から拝領したと言われる「本」の字を表した太閤判と呼ばれる銅印⁵を押すのが通例だが、本折紙には太閤判ではなく「本阿弥印」という黒印が付されている。鑑定小札と折紙の筆跡を比較しても同じ人物によるものとは考え難く、鑑定小札は本阿弥光遜氏によるもので、折紙は別人によるものとするのが妥当であろう。



【写真2】折紙（表）



【写真3】折紙（裏）



【写真4】鑑定小札（表）



【写真5】鑑定小札（裏）

3. 鎌倉国宝館の刀剣展示について

今回紹介した雲次に限らず、鎌倉国宝館で刀剣が展示されることは珍しい。毎年行われる鶴岡八幡宮所蔵の宝物を展示する古神宝展では、国宝の沃懸地杏葉螺鈿太刀の拵が展示されるが、刀身は展示していない。毎年恒例の特別展以外では、平成 30 年に鎌倉国宝館開館 90 周年記念として開催された特別展「鎌倉国宝館 1937－1945 一戦時下の博物館と守り抜かれた名宝―」では、国宝の太刀銘正恒、重要文化財の太刀銘国吉、刀銘長光、太刀各銘相州住綱広作・綱家作・康国作の 6 口が展示された⁶。しかし、刀剣が主たる展示物の特別展は、近年は行われていない。鎌倉国宝館の開館から現在に至るまでの業務を記録した『庶務日誌』や過去の展覧会のチラシ、招待状など過去の記録を見ていくと、鎌倉国宝館の展示で、刀剣を中心とした特別展は開館以来 4 回開催していることが分かった。以下にその概要をまとめる。

①鎌倉国宝館創立十五周年記念 鎌倉時代刀剣展覧会

会期 昭和 17 年 (1942) 10 月 15 日～同 25 日

主催 鎌倉市

主な展示品 短刀無銘伝正宗 (名物九鬼正宗、旧国宝・現国宝)、短刀無銘伝貞宗 (名物寺澤貞宗、旧国宝・現国宝)、太刀銘筑州住左 (名物江雪左文字、旧国宝・現国宝)、短刀銘吉光 (名物厚藤四郎、当時未指定・現国宝)、太刀銘大和国尻懸住則長作 (当時重要美術品・現重要文化財)、太刀銘長光 (旧国宝・現重要文化財)、光徳筆刀絵図、等計 92 点

展示概要 展覧会開催にあたり委員会が構成され、会長に当時の鎌倉市長兼鎌倉国宝館長の鈴木富士彌、委員長に小泉親治、委員に本間順治、石渡信太郎、青柳謙三、森栄一、小倉惣右衛門、佐藤貫一、尾崎元春、辻本直男、そして最後に鎌倉国宝館主事の相澤善三が並ぶ。市長兼館長の鈴木および主事の相澤は鎌倉国宝館からの参加だが、それ以外の人物は、本間順治・佐藤貫一の両名をはじめ、当時の刀剣界の第一線で活躍した面々である。いかに本展覧会が規模の大きいものであったかがうかがえる。これだけ豪華な委員を揃えているからか、その展示刀剣も錚々たるものである。上記の正宗や貞宗、粟田口吉光など鎌倉時代の代表的な刀剣を集め、展示刀剣 82 口のうち 69 口が当時の国宝⁷および重要美術品という威容を誇った。

②鎌倉・室町名刀展【写真 6】

会期 昭和 30 年 (1955) 10 月 25 日～11 月 6 日

主催 鎌倉市教育委員会・神奈川県教育委員会

後援 東京国立博物館・美術刀剣保存協会・鎌倉刀剣会

主な展示品 刀無銘正宗 (名物石田正宗、重要文化財)、短刀朱銘本阿花押 (名物朱判貞宗、重要文化財) 刀金象嵌銘郷義弘⁸ (名物桑名江、重要文化財)、太刀銘正恒 (国宝)、刀無銘青江貞次 金象嵌銘羽柴五郎左衛門尉長 (名物にっかり青江、目録では神奈川県指定文化財・現重要美術品)、黒漆太刀拵 源三位頼政所持獅子王太刀一口 (当時未指定・現重要文化財)、鐔銘埋忠明寿 (重要美術品)、等計 76 点

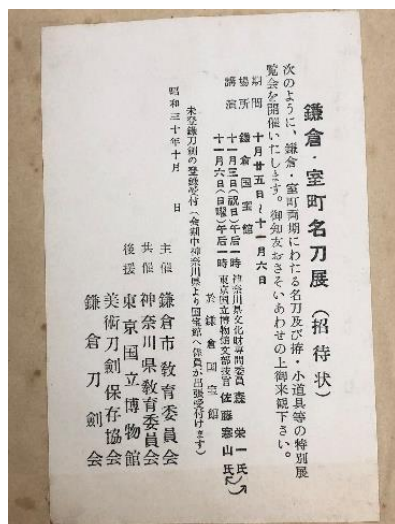
展示概要 鎌倉時代から室町時代にかけて作られた古刀を中心にした展示。『庶務日誌』によると、神奈川県文化財専門委員を務めた本阿弥宗景氏と森栄一氏が何度か来館し展示の打ち合わせを行っている。鎌倉市教育委員会と神奈川県教育委員会の共催であり、「出品目録並解説」を森氏が執筆していることなどから、展示は森氏が中心となって行ったと思われる。

③江戸時代名刀展【写真7】

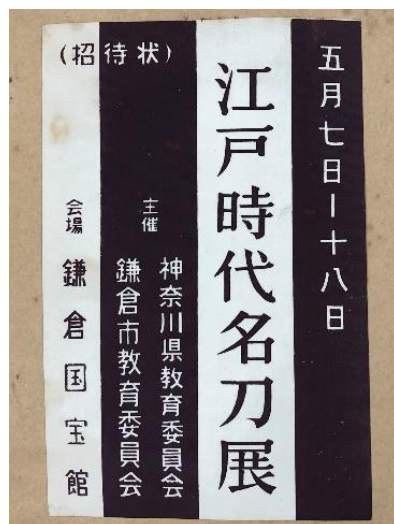
会期 昭和33年(1958)5月7日～同18日
 主催 鎌倉市教育委員会・神奈川県教育委員会
 後援 財団法人日本美術刀剣保存協会・神奈川県支部連合会
 主な展示品 刀洛陽堀川住国広造 慶長十七年二月日(神奈川県指定文化財)、刀銘一竿子粟田口忠綱 彫同作(神奈川県指定文化財)、刀銘相州住綱広、刀銘長曾祢興里入道虎徹(神奈川県指定文化財)、等計52点
 展示概要 江戸時代の新刀・新々刀を中心とした展示。②と同じく鎌倉市教育委員会・神奈川県教育委員会の共催であり、鎌倉・室町名刀展に続く形で開催されたと思われる。こちらの「出品目録並解説」は執筆者不明。本展覧会は刀剣のみであり、拵や鐺等は出品されていない。

④鎌倉市制施行二十周年記念 新春特別展 鎌倉名刀展【写真8】

会期 昭和35年(1960)1月1日～同17日
 主催 鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館
 後援 日本美術刀剣保存協会鎌倉支部
 主な展示品 太刀銘正恒(国宝)、太刀銘安綱、太刀銘大和国尻懸住則長作(重要文化財)、太刀銘長光(重要文化財)、刀金象嵌銘雲次、刀無銘伝正宗(名物武蔵正宗、重要美術品)、刀無銘伝正宗(名物俱利伽羅正宗、重要美術品)、等計84点
 展示概要 鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館の主催で行われた展覧会。鎌倉名刀展と銘打っており、これは鎌倉時代の刀剣という意味ではなく、当時鎌倉にある、あるいは鎌倉在住の人が所蔵している名刀の展覧会という意であろう。そのため出品者はそのほとんどが個人であり、他所から借用しているのは鶴岡八幡宮と日本美術刀剣保存協会のみである。内容は平安時代から江戸時代までの刀剣と拵、鐺を展示している。この展覧会で今回紹介した雲次が出品されている。その後、手続きを経て昭和37年4月1日付で鎌倉国宝館に寄贈された。



【写真6】鎌倉・室町名刀展招待状



【写真7】江戸時代名刀展招待状



【写真8】鎌倉名刀展招待状

以上のように、戦前の昭和 17 年に「鎌倉国宝館創立十五周年記念 鎌倉時代刀剣展覧会」が開かれ、戦後昭和 30 年代に 3 回にわたり刀剣の特別展が開催された。しかし、昭和 35 年を最後に鎌倉国宝館で刀剣に関する特別展は行われなくなる。原因として、第一に刀剣および関連資料の所蔵品の少なさが挙げられる。上記の 4 回の展覧会のいずれも鎌倉国宝館所蔵品はただ一つとして展示されておらず、現在も鎌倉国宝館が収蔵している刀剣はほとんどない。戦前は本間順治氏や石渡信太郎氏が刀剣を預けているだけでなく、常設展示の刀剣もあり、定期的に手入れを行っていたことが『庶務日誌』からわかる。しかし、戦後連合国軍最高司令官総司令（以下 GHQ）が刀剣を武器として接收しようとしたため、その多くは鎌倉国宝館から引き揚げたと考えられる。その結果、鎌倉国宝館から刀剣類はほとんどなくなってしまふ。第二に、刀剣展示の難しさがある。解説文の執筆や展示の際の照明の当て方など、数口ならばともかく、何十口もの刀剣展示を行うには、刀剣に詳しい人物の協力が必要不可欠である。

その後、しばらく刀剣の展示は行われず、昭和 30 年代になると計 3 回刀剣展が開催されている。開催に際し、神奈川県文化財専門委員の本阿弥宗景氏と森栄一氏が何度か来館している。森氏は昭和 17 年の特別展でも委員を務め、昭和 30 年代の展覧会では本阿弥氏とともに開催に尽力している。

本阿弥宗景氏は刀剣研磨と鑑定を生業とする本阿弥家の当主であり、神奈川県文化財専門委員⁹や神奈川県文化財協会理事を務めた¹⁰。鎌倉市の在住で、森栄一氏とともに国宝館に何度も足を運んでいた。戦後、GHQ が刀剣を武器として接收しようとしたが、美術性が認められたものに限り登録を行えば所持を認めるという方針に変わり、本阿弥氏はその登録に携わっている。また、鶴岡八幡宮の刀剣の登録にも関わり、手入れも行っていた。森栄一氏は、本阿弥氏と同じく神奈川県文化財専門委員や神奈川県文化財協会理事¹¹、日本美術刀剣保存協会鎌倉支部の初代支部長などを務めた¹²。鎌倉市在住で刀剣をはじめ多くの文化財を所有し、鎌倉国宝館の刀剣展示に多数刀剣類を出品している。昭和 25 年時点で、国宝（現在の重要文化財）の太刀銘備前国長船住長義（現所有者・蟹仙洞）、太刀銘備州長船住国宗（現所有者・不明）、絹本著色孔子像（現所有者・東京国立博物館）、これらに加え、重要美術品を 18 点所蔵していた¹³。国宝館には昭和 30 年以降何度も来館し、展示に深く関わっていたものとみられる。森氏は昭和 17 年開催の「鎌倉国宝館創立十五周年記念 鎌倉時代刀剣展覧会」でも委員を務めており、戦前から国宝館の刀剣展示に関わっていた。両氏と同じく文化財専門委員を務めた三上次男氏、本阿弥氏は内々を見ながら判断し、森氏は外へ積極的に活動するという趣旨の言葉を述べており¹⁴、国宝館の展示にあたっては、本阿弥氏に比べ森氏の来館が圧倒的に多いことから、展示の打ち合わせは森氏を中心に行われたのであろうと思われる。

昭和 30 年代の特別展では、昭和 30 年と同 33 年の 2 回は鎌倉市教育委員会と神奈川県教育委員会の共催で、前者は鎌倉時代・室町時代の刀剣を展示、後者は江戸時代の刀剣を展示した¹⁵。県規模で行う刀剣展はその 2 回で完結し、3 回目は、日本美術刀剣保存協会鎌倉支部の協力のもと、個人蔵の刀剣を中心に展示している。昭和 17 年の展示を全国規模のものと考えれば、昭和 30 年と同 33 年は県単位での展示、昭和 35 年は市単位での展示ということで、鎌倉国宝館での刀剣展示は一段落したと思われる。そして、これ以降刀剣を主たる展示物とする特別展は現在に至るまで行われていない。ここまで見てきたように、どの展示でも鎌倉国宝館および鎌倉市のみで行った刀剣展示はない。本阿弥宗景氏や森栄一氏といった、県の文化財専門委員かつ鎌倉在住という立場の方々があったことが、これらの展覧会を開催できた大きな要因だったと考えられる。

おわりに

鎌倉国宝館では、戦前から戦後にかけて合わせて4回刀剣の展覧会を行っていたことが分かった。特に戦前は、当時刀剣界の最前線で活躍した方々により委員が構成された規模の大きいものであった。それだけでなく、彼らの中には刀剣を国宝館に寄託していることも分かった。中でも本間順治氏は、『庶務日誌』で「本館相談役」との記載があり、鎌倉国宝館と深く関わっていることが窺える。また戦後の展覧会では、本阿弥宗景氏と森栄一氏の協力により、昭和30年代に3回刀剣の展示が行われている。

戦前から戦後にかけての鎌倉国宝館と刀剣界の関係について、今後さらに検討を加えていきたい。

註

1. 金象嵌銘は刀本来の銘ではなく、磨り上げられて無銘になった刀を極めた際に入れる銘の一つ。
2. 鎌倉国宝館『鎌倉市制施行二十周年記念 新春特別展 鎌倉名刀展 展示出品目録』1960
3. 得能一男『日本刀辞典』光芸出版 1973
4. 本阿弥光遜は、小札の説明として「下げ札の改められたもので、明治以降、成善（本阿弥琳雅。刀剣研磨師で本阿弥光遜の師。）が用いたので私も用いて居ります。刀名は寸法と年月日と記入して台帳に載せて置きます。（括弧内筆者）」と記している。（本阿弥光遜「本阿弥家の鑑定書について」佐藤貫一編『新修刀剣美術 合本1』1972 初出『霜華』10・11・12 1949）
4. 得能一男『日本刀辞典』光芸出版 1973
5. 本阿弥家九代光徳が豊臣秀吉から拝領したと言われる銅製の角印。「本」の字が刻まれる。本阿弥宗景氏を経て現在はその跡を継いだ本阿弥光次氏が所蔵する。「太鼓判を押す」という慣用句の語源になったという説がある。
6. 鎌倉国宝館『開館90周年記念特別展 鎌倉国宝館1937—1945—戦時下の博物館と守り抜かれた名宝—』2018
7. 旧国宝。現在の重要文化財と同じ区分にあたる。昭和25年の文化財保護法施行から国宝・重要文化財という区分ができた。
8. 「出品目録並解説」では名称が「金象嵌銘郷義弘」となっているが、刻まれている実際の銘は金象嵌銘で佩表に「義弘本阿（花押）」差表に「本多美濃守所持」である。解説文には、これらの銘文が載っているため、わかりやすいように「郷義弘」としたのであらうと思われる。
9. DVD「シリーズ—私と鎌倉— 一刀に魅せられて—本阿弥宗景」（鎌倉市制作）1987。本阿弥宗景氏の著作やその功績を知ることができる資料は少なく、鎌倉市制作の本映像は同氏の経歴や功績を知ることができる貴重な資料である。
10. 『かながわ文化財』72 1976。同誌に掲載された役員名簿から、常任理事に貫達人氏、理事に赤星直忠氏、監事に澤寿郎氏といった名が見え、鎌倉市、鎌倉国宝館に関わりのある人物が多くいたことがわかる。
11. 前掲註10に同じ。
12. 森栄一『鎌倉山 かたなと随談』私家版1985
13. 神奈川県『昭和25年史跡名勝天然記念物一覧・国宝及び重要美術品一覧』1950
14. 前掲註9に同じ。
15. この区分は古刀と新刀・新々刀によるものであらうが、おそらく一般向けに時代で区分した名称にしたのだと思われる。